

はじめに—文学の場

第一部では、フランスを中心に、文学を「社会の中の芸術」の視点からみていく。その際に「文学の場」の概念を導入する。「文学の場」とは、作者が作品を生み出す場、語り手など媒介者の場、聴衆や読者が作品を鑑賞・享受する場、のことである。媒介者は作者が兼ねる場合もある。すなわち、作者から聴衆／読者に、作品が直接渡される場合である。一連の文学活動を、生産—流通—消費の図式でとらえるならば、作品創造（生産）—作品の公刊、伝播（流通）—作品の受容（消費）ということになる。そのそれぞれについて、またその全体について、いつ、誰が、どこで、どのようにして、どのような動機でそれらに関わったか、などが文学の場である。

「場」とは、空間的な場所のみならず、時間的な場、すなわち機会、また作者、媒介者、鑑賞者の身分や人間関係などの社会的な環境、さらにはその社会のイメージーションのあり様も含む。言い換えれば、文学という人間の営為が行なわれる、自然的、社会的、思想的環境のことである。

第一章では、文学の場としてのキリスト教、第二章では、文学の場としての宮廷、第三章では、文学の場としての農民と都市民、の視点から、具体的な作品を取り上げながら、作品創出の場、媒介の場、享受の場をみていく。

第一章から第三章へかけては、ゆるやかな時間軸も考慮されているが、決して厳密な時系列に沿ったものではない。

また各章で取り上げられている文学ジャンルも、第一章では聖人伝や武勲詩、第二章ではロマン（物語）、第三章ではファブリオが中心となっはいるが、これも決して文学ジャンルの視点からのみの章立てではなく、あくまでも文学の場の視点から、文学活動の三つの相をクローズアップしたに過ぎない。全体として、フランスを中心とするヨーロッパ中世文学の特徴を、社会の中の芸術の視点から浮かび上がらせるのがねらいである。

第一章では「上からの言説」、第二章では「横への言説」、第三章では「下からの言説」というキーワードを付して考察したい。